



○ロニケラ栽培のポイント

- ①植え付け場所…樹木の下など日陰は避け、つるを伸ばすスペース（アーチ、フェンスの設置など）を考慮する。
- ②植え付け時期など…5月～秋まで可能ですが、気温が高い真夏だけは避けましょう。植え穴は、将来根が張るので深さ、広さともに30cm以上とし、土に完熟した牛糞堆肥や腐葉土を混ぜてやります。
- ③肥料…ほとんど必要ありません。
- ④剪定…ほとんど必要ありませんが、あまりにも茂り過ぎるようなら、古い枝や弱い枝を切ります。この際、枝の途中で切るとさらに枝が暴れますので、付け根から切ります。剪定の時期はいつでもかまいません。
- ⑤病害虫…丈夫なため、ほとんど病害虫がつきません。
- ⑥誘引…上に伸ばすと上の方にしか花がつかなくなりますので、他のつる性植物と同様、できるだけ横に伸ばすと枝がよく伸び、花も均等によくなります。
- ⑦増殖…株分けはできないので、挿し木で増やします。時期は新しい枝が伸びる初夏が適しています。挿し芽は、新枝を3節以上で切り、先端を落として一番上の節だけ葉を残し、下の2節までを挿し床に埋めます。根がついて大きくなれば、鉢上げします。

北米原産つる性植物
一般的には「ハニーサックル」の名で親しまれているスイカズラ科のロニケラは、病害虫の被害がほとんどなく、施肥や剪定の必要もあまりない、北アメリカ原産のつる性植物です。

日本で園芸に多用され、代表的なのが「突抜忍冬（ツキヌキニンドウ）」と「スイカズラ」です。ツキヌキニンドウは、互生する葉のうち花に一番近い葉同士がくっつき、その葉の間を茎が貫くという変わった葉の付き方や、常緑植物でありながら、褐色の葉になり

ながら冬を耐え忍んで越すことから、その名前がつけられています。スイカズラは、花の基部にみつを溜めており、吸うと甘いので「吸い葛」の字があてられています。また、赤い実が2個くっついて瓢箪のように見える「瓢箪木（ヒヨウタンボク）」もロニケラの仲間になります。

しまなみ農業だより 手間のかからない花 ロニケラ

5月になると様々な花が次々と咲いて庭が華やかになる半面、花の手入れや雑草管理など、忙しくなる季節です。そんなときにガーデニングの助けになるのは、「手のかからない植物」です。



突抜忍冬（ツキヌキニンドウ）



瓢箪木（ヒヨウタンボク）

間になります。
ロニケラは7月前半から花が咲き始めます（ニンドウは4～8月）が、開花前のつぼみも愛らしく人気があります。秋には赤い実がつき長期間楽しめますが、ロニケラは実に毒のあるものが多いので食べるのは禁物です（ハスカップは例外的に食用とされています）。また、甘い香りを出す種類が多いのもロニケラの特徴です。旺盛につるを伸ばすので、アーチなどにかかると庭に動きと立体感が出ます。つるバラやクレマチスとも相性が良いので、上手に組み合わせると庭を華やかに演出できます。